**いとうせいこう×奥泉 光**

**＜文芸漫談シーズン６＞**

**大江健三郎『水死』を読んでみる**

この企画は、いとうせいこうと奥泉光が、小説の面白さを、笑いを取りながら伝えたいと、漫談形式で始めた文学ライブです。

芥川賞作家と稀代の仕掛人が捨て身でおくる、漫談スタイルの超ブンガク実践講座。

*小説の書き方・読み方がクスクスわかる？かも！*



2006年5月から年3回のシリーズで始まったこの会は、お客様に支えられながら続いてきました。コロナ禍で2年間は自粛しておりましたが、昨年の4月より再開し、今回はその53回目です。会場は演劇の街・下北沢です。

内容、構成はいたってシンプルで、作家・クリエーターとして活躍する“いとうせいこう”と、芥川賞作家であり大学教授の“奥泉光”が、名作と言われる文学作品を笑いを取り入れながら紐解いて行く漫談形式のトークショー（文芸漫談）です。

同類のトークショーのように、作品への理解を与えることにこそ違いはないのですが、そこに、博学がユーモアをまとったような二人の『笑い』が入ることにより、お客さまの興味をより深いところまで誘い、“豊かな文学”になるのでは、との試みです。

今回の「水死」は、ノーベル賞作家が生涯をかけて模索してきた「父の水死」という主題をめぐる小説。終戦の夏、父はなぜ洪水の川に船出したのか？母の死後10年を経て、父の資料が詰め込まれている「赤革のトランク」が遺言によって引き渡されるのを機に、生涯の主題だった「水死小説」に取り組む作家・長江古義人（ちょうこうこぎと）。

そこに彼の作品を演劇化してきた劇団「穴居人（ザ・ケイヴ・マン）」の女優ウナイコが現れて協同作業を申し入れる・・・・・。

何だ、それなら知っているよ！と、言われる方も、二人の手にかかると、こんな読み方もあったのかと納得いただけるものと思いますよ！

出演■**いとうせいこう／奥泉 光**

日時■**2023年11月24日（金）19：00開場／19：30開演**

料金■全席指定席　予約・当日共　☆3,000円

会場■北沢タウンホール（☎ 03-5478-8006）世田谷区北沢2-8-18

　　　　　　小田急線、京王井の頭線「下北沢駅」東口（中央口）より徒歩5分

ﾁｹｯﾄ問合せ■Ｋ・企画　（TEL＆FAX 03-3419-6318）

　　　　　　　HP < http://www.k-kikaku1996.com/work/bunman/index.html>

　　　　　■イープラス　< https://eplus.jp/>

　　　　　■チケットぴあ　Pコード：650908　< https://t.pia.jp/>

■カルテット予約フォーム

　　　　　　　https://www.quartet-online.net/ticket/bunman-53

主催■舞台よろず相談所 Ｋ・企画

※コロナ感染予防のため、ご来場の際は必ずマスクを着用してください。

　また、受付にて検温をさせていただきますが、37.5度以上の場合はご入場できませんの

で、あらかじめご了承ください。

**『水死』梗概**

70代の小説家、長江古義人は、死んだ母の残した赤革のトランクに入っているはずの父の日誌や書簡をもとに、終戦の夏に、増水した川に短艇で漕ぎ出して謎の死を遂げた超国家主義者の父についての「水死小説」を書くことを目論み、故郷の「森の谷間の村」に帰郷する。古義人に演劇集団 「穴居人 （ザ・ケイヴ・マン）」の代表の穴井マサオと所属女優のウナイコが接触してくる。彼らは古義人の全作品を総合した演劇をつくる構想をたてており、その取材のためである。

古義人がトランクを開けてみると、思惑に反してめぼしい資料はなかった。早々に「水死小説」の構想は頓挫してしまった。「水死小説」の頓挫に落胆した古義人は「大眩暈」と作中で称される病気に襲われる。病身の古義人は知的障害を持つ息子アカリに対して、あることから思わず「君はバカだ」と言ってしまい親子はかつてない断絶状態になる。

「水死小説」の頓挫でマサオの構想も暗礁に乗り上げる。ウナイコは独自の企画を立てて「「死んだ犬を投げる」芝居」と作中で称される特殊な形式の芝居を始めて、夏目漱石の『こころ』を題材にする。そして『こころ』で作中の「先生」の自殺の引き鉄をひいた「明治の精神」とは何かを問う。古義人は、赤革のトランクに収められていたフレイザーの『金枝篇』を手がかりにして、超国家主義者の父の一番弟子であった中国引揚者の大黄（ギシギシ）から話を聞きながら、父の死の真相や意味を掘り下げていく。

ウナイコは、古義人の故郷に伝わる一揆の伝承を素材に一揆指導者で性的に陵辱された「メイスケ母」の芝居を作ろうと奔走するようになる。ウナイコはこの芝居を通して、高校生時代に文部科学省の高級官僚の伯父・小河から受けたレイプを告発しようとしていた。小河はそれを止めようとして、上演前日にウナイコを、大黄ら地元の右翼活動家が拠点としていた「錬成道場」の跡地の施設に軟禁する。ウナイコは小河から暴行を受ける。大黄は秘蔵していたピストルで小河を撃ち、古義人に「長江先生の一番弟子は、やっぱりギシギシですが！」と言葉を残して森の奥に去る。森々と展がり、淼々と深い谷間の森の中の葉叢に顔を突っ込んで、立ったまま水死を遂げる大黄を古義人は想像で思い描く。

**大江健三郎(オオエ　ケンザブロウ)　＜1935年～2023年＞**

東京大学文学部仏文学科卒業。

大学在学中の１９５７年「奇妙な仕事」で東大五月祭賞を受賞する。

以後、１９５８年「飼育」で芥川賞。

１９６４年『個人的な体験』で新潮社文学賞。

１９６７年『万延元年のフットボール』で谷崎潤一郎賞。

１９７３年『洪水は我が魂に及び』で野間文芸賞。

１９８３年『「雨の木」を聴く女たち』で読売文学賞、『新しい人よ眼ざめよ』で大佛次郎賞。

１９８４年「河馬に噛まれる」で川端康成文学賞。

１９９０年『人生の親戚』で伊藤整文学賞をそれぞれ受賞。

１９９４年ノーベル文学賞を受賞。

**出演者紹介**

**【いとうせいこう】**

1961年、東京生まれ。早稲田大学法学部卒業。作家、クリエーター。

『ノーライフキング』で小説家としてデビュー。最新小説に『小説禁止令に賛同する』。主な作品に『想像ラジオ』『存在しない小説』『鼻に挟み撃ち他三編』。

ノンフィクション･対談集に『国境なき医師団を見に行く』『ラブという薬』『今夜、笑いの数を数えましょう』などがある。

その他、舞台・音楽・テレビなどで活躍中。

公式HP＝http://www.cubeinc.co.jp/ito/

**【奥泉 光】**

1956年、山形生まれ。国際基督教大学大学院修了。小説家･近畿大学教授。

『石の来歴』で芥川賞、『東京自叙伝』で谷崎賞、最新刊の『雪の階』では柴田錬三郎賞を受賞。

主な小説に『虫樹音楽集』『シューマンの指』『神器　軍艦「橿原」殺人事件』『グランド･ミステリー』など。

いとうせいこうとの共著に『文学の聖典』『世界文学は面白い｡』がある。

公式HP＝http://www.okuizumi.com/